

69

蝦夷地全図		
A J -17		
蝦夷地、樺太、千島の絵図。地誌的な詳しい説明が記されている。下北半島を除けば、いずれの地形も異様な形状である。65×110cm		

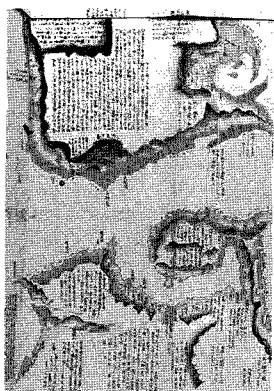
- ◆ 昭和58年に当館で開かれた葵文庫展の「目録」によれば、本地図は古川古松軒（1726－1807）の作とされている。また、古川古松軒の著作『東遊雑記』（平凡社東洋文庫 082-112-27）の解題には、古松軒が作成した地図として「蝦夷全図」があげられている。しかし、当館所蔵の地図には、作成年代・所蔵機関を示す印記はなく、制作者を特定できる記述もない。「ユウハリ」（現在の夕張岳）のところに、天明6年(1786)刊行の『三国通覧図説』（林子平）を引用（蝦夷地産金説を虚説としている）していることからみて、19世紀前半ごろの作成ではないかと推定される。

本地図は、地勢が赤・緑・黄の色別であらわされており、産物・風俗・交易の状況などが、該当箇所に墨書きで書き加えられている。

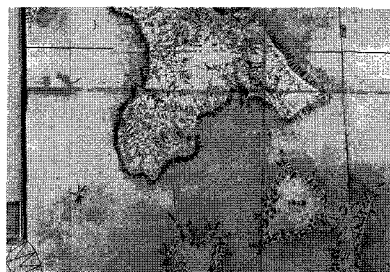
70

官版実測日本地図 蝦夷諸島		
A J -19		
蝦夷地の他、下北半島、千島列島、樺太の一部が描かれている。詳細な地名と経線・緯線が書き込まれているのが特徴である。152×200cm		

- ◆ 寛政11年(1799)、幕府は、蝦夷地を直轄地とした。それに伴い、天文方を中心として、伊能忠敬・間宮林蔵・中村小市郎らによる蝦夷地の測量に基づき、のちにヨーロッパ製の地図を訂正させるほどの精密な地図を作った。しかし、この地図に描かれているのは海岸線だけであり、内陸部はほとんど空白であった。安政5年(1858)・6年、箱館奉行は松浦武四郎に命じてそれに山脈、河川、地名などを記入させた。武四郎は、経緯度各1度ごとに1枚の地図を作成し、26枚の『東西蝦夷山川地理取調図』を提出した。彼は、この他に北蝦夷の地図17枚をつくり、前記の26枚と併せて蝦夷地図をひとまず完成させた。それが、後に『官版実測日本地図』の中の蝦夷諸島及び北蝦夷として採用されたのである。本地図はその内の蝦夷諸島の地図である。当館では北蝦夷の地図(AJ-18)も所蔵している。
- ◆ 上記の葵文庫展「目録」では、明治3年(1870)に大学南校で出版されたものと推定している。



69 蝦夷地全図（部分）



70 官版実測日本地図 蝦夷諸島（部分）